



Data

監督：ニコライ・フルシー
 製作：ジェリー・ブラッカイマー
 原作：ダグ・スタントン『ホース・ソルジャー』（ハヤカワ・ノンフィクション文庫）
 出演：クリス・ヘムズワース／マイケル・シャノン／マイケル・ペーニャ／ナヴィド・ネガーバン／トレバンテ・ローズ

👁️👁️ みどころ

「アフガン戦争」を描いた名作は多いが、2001年9月11日の「同時多発テロ」からすでに18年。タリバンのテロを指導したビンラディンの捕縛も『ゼロ・ダーク・サーティ』（12年）の通り完了したが、米国撤退後のアフガニスタンの安定はまだまだ。トランプ大統領の登場以降の中東での紛争激化の影響で、再び混乱するのでは？そんな心配も・・・。

そんな時代状況の中、9.11直後の「アフガン最初の戦い」では、12名の「ホース・ソルジャー」が大活躍！そんな物語は09年のベストセラー本によって明らかにされたが、本作のスクリーン上で明らかにされるその実態は・・・？

憲法9条改正とそれによる自衛隊の海外派兵反対！そんな声が充満する中、本作をどう考えるかは朝日新聞的には難しいだろうが、「いざ〇〇」「いざ△△」を想定すれば、日本でもきっと本作のヒーローのような男の登場が待たれるはずだが・・・？



■□■アフガン戦争の内幕を描くあっと驚く実話モノが登場！■□■

イラク戦争の内幕を描く「あっと驚く実話モノ」では、クリント・イーストウッド監督の『アメリカン・スナイパー』（14年）（『シネマ35』24頁）や、キャスリン・ビグロー監督の『ハート・ロッカー』（08年）（『シネマ24』15頁）等の名作があるが、2001年の9.11世界同時多発テロの後、ブッシュ政権が始めたアフガニスタン戦争の内幕を描く「あっと驚く実話モノ」が登場！それが、チラシで「9.11直後、敵勢5万人に対し、

たった12人で戦いに挑んだ米軍騎馬隊。」の文字が躍っている本作だ。そこでの「武器は魂と馬」だが、西部開拓時代の西部劇じゃあるまいし、なぜ「グリーンベレー」が「ホース・ソルジャー（米軍騎馬隊）」になってアフガンへ・・・？

それは、9.11直後の「最初の戦い」のためにアフガンに飛び、反タリバンの地元勢力「北部同盟」のリーダーであるドスタム将軍（ナヴィド・ネガーバン）から「ここからは馬を駆使して戦うしかない」と言われたためだ。12人の「ホース・ソルジャー」を率いるミッチ・ネルソン大尉（クリス・ヘムズワース）（だけ）は牧場育ちだったから馬に慣れていて、副官のハル・スペンサー准尉（マイケル・シャノン）をはじめ、他の隊員はすべて乗馬体験すらゼロだったから、それだけでもこの任務は大変だ。しかも、彼らの任務はドスタム将軍と共に、テロの首謀者ビンラディンが指導し、最新のミサイルや戦車を備えているタリバンが圧倒的支配を保っている、アフガン北部の要衝の地マザールシャリーフ（通称マザール）を制圧すること。より具体的には、敵地深くに立ち入って、その正確な“座標”を味方の空軍基地に伝え、空爆要請をすることによって、順次タリバンの勢力を排除しながら最終的にマザールを制圧することだ。それが命がけの任務であることは明らかだが、ネルソンは故郷に残してきた妻に「必ず帰る」と約束。さらに、スペンサーにも「誰一人失わない。帰国するには勝てばいい。」と断言して、アフガンへ向かったが・・・。

■□引退した主人公がなぜ再志願を？■□

日本では安倍晋三内閣の下で少しだけ憲法改正の必要性が議論され、その中でも憲法9条改正問題が議論されるようになっていたが、「モリカケ問題」を契機として安倍内閣の支持率が下落したため、それが低調になっているのは残念。これでは、「いざ、朝鮮半島有事！」とか、「いざ、北朝鮮からのミサイル到来！」という事態や、自衛隊の「防衛出動」という事態になっても、その時に至って「自衛官を辞退」というヤカラが続出するのでは・・・？ そんな心配がある。しかし、本作導入部を観ていると、アメリカでは全くその正反対だから、良くも悪くもそんな導入部に注目！ そんな導入部になったのは、①『ブラックホーク・ダウン』（01年）（『シネマ2』228頁）の製作者で、本作の制作に乗り出したジェリー・ブラッカイマー、②デンマークCM界の鬼才で、コソボ紛争を追った報道写真家でもあるニコライ・フルシー監督、そして③『羊たちの沈黙』（91年）でアカデミー賞を受賞したテッド・タリーと、『ザ・タウン』（10年）で全米脚本家組合賞にノミネートされたピーター・クレイグという脚本陣が、いったんは内勤に転属したミッチ・ネルソン大尉が、なぜ再び9.11直後にアフガンへの「最初の任務」に志願したのかに大きな興味を持ったためだ。

本作は、作家ダグ・スタントンの2009年のベストセラー『ホース・ソルジャー』を映画化したものだが、「アメリカがまだ混乱していたその時、12人の勇敢な米軍特殊部隊の隊員（通称グリーンベレー）が祖国や愛する者たちと離れ、戦乱状態のアフガンでの危

険な極秘任務に向かった」ことは、つい最近までほんの一握りの人間しか知らなかったらしい。妻と幼い娘のために願い出た内勤への転属願いが認められ、真新しい住居で楽しい模様替え作業に従事していた時に、なぜ、よりによって9. 11テロの様子が生中継されてきたの？米軍特殊部隊（グリーンベレー）の戦士としてそれを見れば、ネルソンは一体どうすればいいの・・・？

そんなバカな男はネルソン大尉だけではなかったようだ。『ノクターナル・アニマルズ』（16年）でアカデミー賞助演男優賞にノミネートされ、近時は『シェイプ・オブ・ウォーター』（17年）で悪役ストリックランドを演じたマイケル・シャノン演じるハル・スペンサー准尉も、そろそろ引退を考え、家族と過ごす時間を求めているにもかかわらず、「もう体力は落ちているが、まだ役に立てることがある。俺は行くべきなんだ」と考えて、ネルソン大尉とともに新たな任務を志願することに。古くはジョン・ウェイン版の『アラモ』（60年）、新しくは2004年版の『アラモ』（04年）（『シネマ6』112頁）に見た、実在した伝説の人物デイヴィ・クロケット等、アメリカには男気の強いヤツが目立っている。それが昨今の日本とは大違いだ。ちなみに、5月14日付産経新聞は「自衛隊の主力隊員になる『自衛官候補生』の入隊が4年連続で採用計画人数を下回ったこと」について「平成29年度の採用では計画8624人に対し、試験を経て入隊の意思を示したのは6852人」だったと報道した。これは防衛省が毎年発表しているデータだが、本当にこんな日本国でいいの？

■□■タリバン、ビンラディン、北部同盟等の復習を！■□■

安倍晋三政権は、中曽根康弘政権、小泉純一郎政権を抜き、吉田茂政権や佐藤榮作政権に続く戦後3番目の長期政権になっているが、彼の「師匠」は2001年に内閣を足踏させた小泉純一郎。他方、1960年の日米安保条約の成立以降、日本の首相とアメリカの大統領はずっと親しい関係になっているが、その親密度におけるベスト1は中曽根康弘とレーガン、ベスト2が小泉純一郎とブッシュだろう。安倍晋三とオバマの仲はイマイチだったが、安倍晋三とトランプとの親密度は濃いものらしい。しかし、ホントにそうであればいいのだが、トランプ大統領のロシア、中国、北朝鮮、そして中東方面やフィリピン等の外交を見ていると、対日本外交のウェイトの大きさは少し心配？

「10年ひと昔」と言われているが、2020年には東京オリンピックが開催されるから、2001年の「9. 11テロ」からは、そろそろ「20年ふた昔」になろうとしている。そして今、タリバン、ビンラディン、北部同盟等々の言葉はかなり記憶の彼方に飛び、その内容を忘れかけているので、本作を鑑賞するについてはそれをしっかり復習する必要がある。ちなみにタリバン政権下のアフガンで生きる13歳の少女の姿は『アフガン零年 OSAMA』（03年）（『シネマ4』266頁）で、ビンラディンの掃討作戦はキャスリン・ビグロー監督の『ゼロ・ダーク・サーティ』（12年）（『シネマ30』35頁）に描かれていたか

ら、本作の鑑賞に合わせてそれらを観れば、アフガン戦争の一端は明確に！

■□■任務はなるほど！しかし、地理がわからん！■□■

本作のパンフレットには、①伏見威蕃（翻訳家／原作『ホース・ソルジャー』翻訳）の「アフガニスタン北部同盟とグリーンベレーたち」、②大久保義信（編集者）の「対テロ戦争を支える爆撃システムと残された課題」、③相馬学（映画ライター）の「実録戦争映画の枠を超えた、今描かれるべきソルジャー・ストーリー」があるので、これらは必読！『アイ・イン・ザ・スカイ 世界一安全な戦場』（15年）（『シネマ39』112頁）では、UAV（無人機）によるテロリストへの攻撃がリアルに描かれていたが、これは軍事技術の進歩の中で辿りついた最新の戦法。2001年の9.11直後のアフガン戦争では、この手の軍事技術はまだ登場していない。

そんな無人機にかわって、本作で空からの爆弾投下の目になるのがネルソンをリーダーとした12名のホース・ソルジャーだ。自分が誘導した空爆で自分が誤爆されたのではたまらないから、正確な座標を教えることが何より大切だが、現実の戦場では否応なく誤爆も起きている。そのため現在では、誘導爆弾のさらなる高精度化と共に、爆弾の低威力化が進められているらしい。本作でもギリギリまで近づいて敵の様子を探ったために、誤爆ストレスになるネルソンたちの姿が描かれているが、なるほどこれを見れば、その後の軍事研究のテーマと技術の進歩ぶりがよくわかる。ちなみに、ロシアは近時「極超音速ミサイル」を発明したことが報道されていたが、良くも悪くも「戦争に勝つため」という目的が科学技術発展の最大の動機になっていることが本作を観ているとよくわかる。

それと対照的に私に全くわからないのが、アフガンの地理と地形。西部劇は西部開拓の歴史だし、これまでたくさんの西部劇を見てきたから、アメリカの地理や地形はしっかり頭の中に入っている。そのため、西部開拓の最終目的地とされていたオレゴンやカリフォルニアの理想郷としての姿は日本人の私でもよく理解できる。また、石油のパイプラインや鉄道の敷設を巡る権力闘争や利害を巡る争いを通して、アメリカの地理と地形はよくわかっている。更に、前述の『アラモ』を観たことによって、アメリカとメキシコとの国境問題や、地形も頭の中に入っている。しかし、アフガンの地理や地形は全くダメ。さらに、アフガンには①タリバンを構成する40%以上を占めるパシュトゥン人、②それに対抗して北部同盟を構成するタジク人、ハザラ人、ウズベク人等がいるそうだが、この民族問題もサッパリわからない。そのため少しイライラする面もあったが、そこは鑑賞後の勉強でしっかり補いたい。

■□■なぜ12人の構成に？原題は？■□■

『オーシャンズ』シリーズは11人から始まり、12人、13人と増えていった。また、近時見た面白いイタリア映画『いつだってやめられる 10人の怒れる教授たち』（17年）も、

第1作の7人から、第2作では10人に増強されていた。他方、『十二人の怒れる男』(57年)の12人は陪審員の数だから、一定している。それと同じように、本作に見るネルソンとスペンサー、そして10名の下士官で構成されるホース・ソルジャーの数は12名で一定しているらしいが、それは、前記コラム「アフガニスタン北部同盟とグリーンベレーたち」で詳しく解説される通り、ネルソン率いるODA(アルファ作戦分遣隊)595はネルソン大尉およびスペンサー一等准尉、そして下士官10人。

他方、『7人の侍』(54年)は、村人から頼まれた利吉・茂助・万造・与平の4人が7人の侍を集める導入部が面白く描かれていた。そのため、侍とは言えない三船敏郎演じる菊千代を含めて、7人の侍のキャラクターが明確にされていく過程が鮮明だった。そしてそれは、日本版を外国版にリメイクした『荒野の7人』(60年)も同じだった。しかし、本作ではODAのリーダーとなるネルソンは、上層部からの任命によるものだから、副官のスペンサー准尉以下の隊員は自分で選んだものではない。しかし、「アフガニスタン北部同盟とグリーンベレーたち」で詳しく解説されている通り、10名の下士官たちはネルソンと昔馴染みの男ばかりだし、その一人一人の能力もすごい。したがって、本作ではネルソンのヒーローぶりだけでなく、スペンサーの副官としての役割や、10名の下士官それぞれの個性やその特殊能力についてもじっくり確認したい。そうすれば、12人の単位でのチームプレーの大切さがわかるはずだし、本作の原題が『12 Strong』とされていることにも納得できるはずだ。

■■■ネルソンとドスタム将軍の相互理解は？決別は必至？■■■

私が中学生の時に観た『アラビアのロレンス』(62年)はすごい映画だった。しかし、ハッキリ言ってその時点では、第二次世界大戦時代にイギリスが中東方面で行った「二枚舌外交」についてよくわからなかった。ところが、その後テレビ放映されるたびに鑑賞していると、その理解が少しずつ深まっていった。それと同じように本作では、ネルソン率いる12名のホース・ソルジャーが北部同盟のドスタム将軍を支援しながらマザール制圧を目指すという大枠はわかっても、ネルソンとドスタム将軍との共同戦線の展開を理解するのは難しい。まして、その中での異国の人間同士の相互理解は大変だ。

それは『アラビアのロレンス』で、ピーター・オトゥール扮するロレンスがアンソニー・クイン扮するハウィタット族の長アウダ、オマー・シャリフ扮するハリト族の長アリラと再三意見が対立したのと同じで、あんな状況下での異民族間の相互理解が難しいのは仕方ない。本作中盤はそんな問題点を内包しながら、さまざまな修羅場でネルソンが真っ先に最前線へ飛び込む勇気と、そこで彼が見せる優れた統率力にドスタム将軍が一目置き始めていく姿が描かれる。そして10日目にドスタム将軍がタリバンに家族を殺された村を奪還した時には、2人の心はしっかり通い始めていたからすごいものだ。

他方、ネルソンが本部の司令官マルホランド大佐(ウィリアム・フィクナー)にマザー

ル攻略の期限として約束したのは、雪が降って道が封鎖されるまでの3週間。ネルソンの作戦がナチスドイツのポーランド侵攻やフランス侵攻、そしてロンメル将軍のアフリカにおける電撃作戦と同じようにいかないのは当然だが、ネルソンの苦戦を感じ取った本部のマルホランド大佐が、同じく北部同盟でドスタムのライバルであるアタの隊に米陸軍の他のチームを派遣したことを知ったため、ドスタム将軍は激怒！その結果、マザールを目前にして作戦から降りてしまうことに。そんなバカな！ドスタム将軍が手を引いてしまえば、いくら強力な空爆があっても12人の「ホース・ソルジャー」だけでマザールを攻略することは不可能だ。ネルソンとドスタム将軍との間で深まっていた相互理解は一体どうなったの？

こんな決別のシーンは『アラビアのロレンス』でアウダやアリとロレンスが決別するシーンと全く同じだ。さあ、そこでネルソンはどうするの？そこでのネルソンの宣言は「たとえ命を失っても、今やめれば、またテロが繰り返される」というもの。しかして、そんな無残なロレンスの戦いは？

■□クライマックス比較 中国v s 米国■□

本作のクライマックスは、マザール直前のターンギー峠で12名のホース・ソルジャーたちが強力な兵器と兵力を備えたタリバンの舞台に突入し、それをやっつけるシーンになる。それはわかっているが、一体どんなやり方で・・・？

ネルソンたちが手に持つ銃が、ジョン・ウェインの時代の西部劇のそれと全然違って高性能なものになっているのは当然だが、それでも馬にまたがっての突進だから左手は使えない。そんな状態で突進してもたちまち敵からの一斉射撃でやられてしまうだけでは・・・？ついそう思ってしまうが、そこは映画だ。中国では昨年『戦狼2』(17年)が1000億円という史上1位の興行収入をあげたがそこでは、クライマックスでのカーチェイスならぬ戦車チェイスが売りだった。それでも、やはりそれを越える見どころは主人公の卓抜した個人技で、ヒーローを演じる中国人俳優の獅子奮迅の奮闘が際立っていた。

そう考えると、本場のハリウッドの戦争映画がそれに負けるわけにはいかないのは当然だ。そのため、本作では『戦狼2』のヒーローに対抗するかのようになり、ホース・ソルジャーのリーダーたるネルソンのまさに不死身の奮闘ぶりに注目！作戦の途中で腰痛を起したスペンサーこそ肝心の戦いで第一線を引いていたが、それでも補助的役割はしっかり果たした上、ネルソン、スペンサー以外の10名の下士官たちは、それぞれの得意技をふんだんに駆使して戦った。その結果、終わってみればスペンサーだけは重傷を負ったものの、ネルソンが約束した通り、ホース・ソルジャー12名は全員救助のヘリに乗り込むことに！『戦狼2』では、「俺たちのバックには中華人民共和国がついている！」と、スクリーン上一面に中国のパスポートが誇らしげに映し出されたが、米国のホース・ソルジャーだってバックには強力なアメリカ合衆国の軍隊が！

現在の米中間では貿易戦争の勃発が心配されている上、中国は国産空母の開発に躍起になっているから、かなり心配。戦争映画のクライマックス比較やヒーローの持ち上げ方比較は、映画レベルの競争で留めておいてもらいたいものだが・・・。

2018（平成30）年5月17日記